
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 213

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 4241. 【バルセロナ・リスボン旅行記】出発前の雑記
- 4242. 【バルセロナ・リスボン旅行記】深層的な自己との出会いをもたらす旅
- 4243. 【バルセロナ・リスボン旅行記】旅行出発の朝に見た夢
- 4244. 【バルセロナ・リスボン旅行記】「神の一音」を求めて
- 4245. 【バルセロナ・リスボン旅行記】絶えず今ここにある生きることの喜び
- 4246. 【バルセロナ・リスボン旅行記】スキポール空港に向かう列車の中で振り返る今朝方の夢の続き
- 4247. 【バルセロナ・リスボン旅行記】晴れ渡るアムステルダムの上空から
- 4248. 【バルセロナ・リスボン旅行記】刹那的な出会いへの感謝の表明
- 4249. 【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナでの音楽的出会い
- 4250. 【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナの街がもたらす陽気さと歓喜
- 4251. 【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在初日に見た不思議な夢
- 4252. 【バルセロナ・リスボン旅行記】自らの人生を生きる作曲
- 4253. 【バルセロナ・リスボン旅行記】変数の変化と友人のブログより
- 4254. 【バルセロナ・リスボン旅行記】スペインの音楽とバルセロナで行う監訳書のレビュー
- 4255. 【バルセロナ・リスボン旅行記】カタルーニャ美術館について
- 4256. 【バルセロナ・リスボン旅行記】荘厳な作りと壮観な眺めを誇るカタルーニャ美術館を訪れて
- 4257. 【バルセロナ・リスボン旅行記】Petit Brotというレストランでの感動的な夕食
- 4258. 【バルセロナ・リスボン旅行記】くつろぎのバルセロナ
- 4259. 【バルセロナ・リスボン旅行記】画家マリアン・バサとのバルセロナの路上での運命的な出会い
- 4260. 【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在三日目の早朝に

4241.【バルセロナ・リスボン旅行記】出発前の雑記

今朝の起床は午前四時であり、ここ最近では三時半から四時に目覚めることが習慣になりつつある。こうした早起きによって、その日一日がこれまで以上に充実したものになっているのを日々実感する。

早起きの効用というのは非常に大きいということが改めてわかる。今日のように四時に目覚めることが習慣になっていると、旅の時だけ早起きをすることに追われることがない。

今日もいつも通りに起床し、いつものように日記を書き、いつものように作曲実践をして、それから自宅を出発できるという余裕がある。しかも今日は、早朝にフルーツを食べ、野菜が少々入った味噌汁まで飲むことができる。こうしたことを全て行ってから旅を始めることができるというのは有り難い。

起床直後には聞こえなかった小鳥たちの鳴き声は、今ではもう十分に聞こえている。私が起床して風呂に入り、風呂から出る頃に鳴き声が聞こえ始め、それは四時半を過ぎたあたりのことだったと思う。それを考えると、そこから一時間が経った今この瞬間に聴いている彼らが生み出す曲は、第二楽章あたりに差し掛かった頃だろうか。

午前五時半を迎えた今、空がダークブルーに変わり始めている。昨夜就寝中には雨が降ったようなのだが、今はすっかり雨も止み、自宅から駅まで歩いていく際には小雨が降ることを覚悟していたのだが、もうその心配はなさそうだ。

六日間のバルセロナの滞在期間中も幸いなことに、日曜日の朝、観光をする前の時間帯に二、三時間ほど小雨が降るだけのようであり、現地では傘を差すことがないかもしれない。もちろん、いつものように折り畳み傘は持っていくが、それを使わないような天気良い日が続いてくれればと思う。

バルセロナに滞在期間中の気温に関しても申し分なく、最高気温は軒並み20度以下なので、非常に過ごしやすいだらう。今日からの旅行では冬用のジャケットは必要ではなく、確かに今日これからフローニンゲンの駅に行くまでは少々冷えるだらうが、マフラーや手袋を持っていく必要もない。

昨日、デン・ハーグに住む日本人の友人と話をしている時に、この季節のオランダの気候に関する話題となった。オランダの春は、暖かくなったと思ったら冬のような寒さが戻り、再び暖かくなったと思ったら、再度また冬のような寒さになる。そうしたシーソーゲームを繰り返しながら、気がつけば夏がやってきて、「これが夏だ」と言わんばかりの日は、なんと一週間から二週間ほどしかない。そもそも一般家庭においてクーラーなどないのがオランダの家の特徴であり、一昨年にフローニンゲン大学の研究機関でインターンをしていた時の指導教授が述べていたように、クーラーが必要になる暑い日など、オランダでは数えるほどしかないのである。

いろいろと雑多なことを書き留めてしまった。今日はもう少ししたら作曲実践を行う。本格的に一曲作るほどの時間はなさそうであるため、作曲上の写経実践を行う。昨日から本格的にこの実践を始めたのだが、もう子供のように楽しんでその実践にのめり込んでいる。まさか写経が童心に帰らせてくれる効果を持っているとは思ってもみなかった。

いや、私は作曲という創造行為においては子供同然なのであるから、そうした純粹無垢な感情が現れるというのはおかしなことではないのかもしれない。仮にこれから数年、数十年、そして一生涯にかけて作曲を継続していくことになったとしても、写経実践を通じて得られる今の気持ちを忘れてくはない。そこに自分の創造活動上の大切なものがあるような気がするのだ。フローニンゲン:2019/4/26(金)05:53

No.1890: At Dusk in Barcelona

The first day to stay in Barcelona is now approaching the end. This city gives me something important. I'll go to bed shortly, appreciating what Barcelona provides me. Barcelona, 20:46, Friday, 4/26/2019

4242.【バルセロナ・リスボン旅行記】深層的な自己との出会いをもたらす旅

これからスキポール空港に向けて出発する前に、仮に一曲作る時間がなければ、作曲はバルセロナに到着し、街の散歩を終えてホテルに戻ってきてから行っても良いかと思う。あるいは、念のためスキポール空港には早く到着するため、空港のラウンジで一曲作ってもいいだろう。空港に到着し

てから搭乗の時間までは二時間弱あるため、ラウンジではおそらく一時間半ほどはくつろげると思う。そうした時間があれば、一曲ほど短い曲を作ることができるかもしれない。

すでにバルセロナの空港からホテルまでの地図などをPDF化し、その他の諸々の準備もできているので、準備に関してはもう心配はいらない。フローニンゲン駅を出発する列車は7:48のものであるから、念のため、自宅を7:10に出て、ゆっくりと歩いて駅に向かいたい。

旅の出発日に自宅から駅に向かう最中は、いつも様々な感情が胸の内に現れる。今日はどのような感情が姿を見せてくれるだろうか。自宅から駅に向かって歩いていくことの中には、そうした楽しみもある。

駅に到着し、切符を購入したら、小さな水を購入するか、オーガニックのココナッツウォーターでも購入しようかと思う。それを持って列車に乗り込み、そこから二時間ほど列車に揺られればスキポール空港に到着する。列車に乗っている間は、日記を執筆することと、とにかく写経実践に集中したい。今の私の実践の核はとにかくこれだ。

今日目覚めたのも、写経を楽しみにしていたからだと言っても過言ではなく、今日生きようとしているのは、写経を楽しみにしているからだと言っても言い過ぎではない。それほどまでに写経実践に愚直に取り組みたいという思いがあり、この実践を通して得られる喜びの感情は計り知れない。

写経実践に向かわせる途轍もなく大きな力が自分の中にうごめいている。もしかしたらそれは、自分の創造活動を司るダイモーンの力なのかもしれない。とにかく今は、そうした力にあやかりながら、その力の流れの中で、写経実践を日々行っていく。場所も時間も関係なく、写経の実践に打ち込んでいく。

今日で言えば、列車や飛行機を通じた移動時間など、PCを広げられる時間には写経実践に打ち込んでいく。あるいは、PCを広げられなくても、これから写経の実践が進んでくれば、理論書の譜例を眺めるだけで音を頭の中で鳴らせるようになってくるかもしれない。いやむしろ、そうした状態に到達することは不可欠であり、そうした状態に至って初めて、自分の真の作曲実践が始まると言ってもいいかもしれない。写経実践の深まりを確認する試金石として、その点を絶えず念頭に置いておきたい。

そうした写経実践に並行して、今日も私は場所も時間も関係なく、言葉を通じた日記を書くだろう。日記の執筆と作曲実践は、確かに異なる実践だが、それらは不可分のものでもあり、両者の根っこは共に一つのものである。それが昨日の友人との交換セッションを通じて改めて判明した。

写経実践と行き来する形で、今回の旅の移動中、さらにはホテルの自室にいる時間は、日記の執筆を旺盛にしていくだろう。過去の日記の編集に関しては、作曲の理論書や楽譜を広げにくい、飛行機の機内の中で進めていこうと思う。

今回の旅を通じて生まれる唯一無二の生命としての言葉および曲がいかなるものになるのかは、本当に未知であり、今からそれらとの出会いが自分でも楽しみである。結局旅とは、自分との深層的な出会いに他ならないのではないかと思えてくる。フローニンゲン:2019/4/26(金)06:09

No.1891: The Early Morning on the Second Day to Stay in Barcelona

The second day to stay in Barcelona just began. I wan to visit the Museu Nacional d'Art de Catalunya today. Barcelona, 04:47, Saturday, 4/27/2019

4243.【バルセロナ・リスボン旅行記】旅行出発の朝に見た夢

これから味噌汁を飲む前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。バルセロナ・リスボン旅行に向けた出発の朝に見た夢は、下記のようなものであった。

最初の夢を一言で述べるならば、それはとてもスリリングなものであった。どういった意味でスリリングだったかという、知的な意味においてである。

夢の中で私は、囲碁界の巨匠と囲碁を打っていた。それは「指導碁」と呼ばれるもので、師匠が弟子に、あるいは実力のある者が自分よりも実力が下の者に囲碁を教えるということを目的にしたものである。なんとそこでは、巨匠が私に囲碁の指導をしていたのではなく、私とその巨匠に指導碁を打っていたのである。私は囲碁など全く経験したことなく、ルールも知らないはずなのだが、囲碁の歴史が始まって以来最強と謳われるその巨匠が思わず苦笑いを浮かべるほどに、高い棋力を私は持っているようだった。

幽玄な部屋の中で、巨匠と私は静かに囲碁を打っていた。畳のなんとも言えない香ばしい香り。達筆さを超えた達筆さの境地にある美しい掛け軸。その下に置かれている見事な花瓶。そうしたものに囲まれながらも、巨匠と私は深く広大な囲碁宇宙の中において、碁石を通じた深い交流を図っていた。それは知的な交流というよりも、魂の交流だと私は思った。

巨匠が彼自身の言葉としての一手を打ち、その言葉と対話をするかのように、私は自分の言葉としての一手を打った。幽玄な部屋にその一手の音がこだました時、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は実際に通っていた小学校にいた。厳密には、ニワトリ小屋の前にいた。そこでニワトリを観察していたのではなく、運動場から靴箱に戻ってくる小学三年生たちの様子を観察していたのである。最初に数名の男子生徒が靴箱に帰ってきたのを目撃した時、私はすぐに異変に気付いた。

それは何かというと、彼らは小学校三年生にもかかわらず、全員頭が白髪だったのだ。身長に関しても成長が遅れているようで、皆比較的小さかった。彼らの白髪は、若白髪とかそういう次元の話ではなく、それこそ70歳や80歳の白髪のそれであった。私は彼らの白髪を見たとき、直感的に、彼らの食生活が劣悪であることが原因だと思った。

不思議なことに、男の子たちの後に靴箱に戻ってきた女の子たちを見てみると、彼女たちの髪は黒々としていた。すると、一人の男の子が私に話しかけてきた。見るとその子は、中学校時代のバスケ部の後輩だった。彼本人であるはずなのだが、なぜかその子は後輩の弟だと述べた。私は、その子が嘘をついているとは思わなかったが、事実として、その子は後輩本人であるはずだった。その男の子は、私がここで何をしているのかに関心を持っているようだった。

私:「今はねえ、小学三先生から六年生までの子供たちを観察してるんだ」

男の子:「ふう〜ん、そうなんだ。何か面白いことわかった？」

私:「うん、まあね」

男の子:「それは良かった。ところで、観察の許可は取ってるの？」

その子は別に大人びているわけでは決してなかったのだが、突然、観察の許可を私が取っているのかを確認してきた。それには一瞬驚いたが、「先生から依頼されてのことだよ」と私は述べた。するとその子は、「それなら良かった」と述べて、靴箱の方に消えていった。フローニンゲン:2019/4/26 (金)06:25

No.1892: A Morning Song in Barcelona

I can't hear a twitter of little birds here in Barcelona. Yet, I can sense a song of this city in the early morning. Barcelona, 06:42, Saturday, 4/27/2019

4244.【バルセロナ・リスボン旅行記】「神の一音」を求めて

たった今、スキポール空港に向かう列車の中に乗り込んだ。出発は間もなくであり、列車が動き出すまでにはもう数分ほどある。今日は金曜日であるから、車内にいる乗客の多くは、通勤や通学をしようとしているのだろうか。そうであったとしても、この国特有のくつろいだ雰囲気は車内に広がっている。車内にはコーヒーの香りも漂う。

一人でこれから目的地に向かう者は新聞を読んでいた、本を読んでいた。数人でどこかに一緒に向かおうとしている人たちは、会話を楽しんでいる。そうした雰囲気の中に、今この瞬間の私はいる。そしてまた、ここに私がこのようにして存在しているということも、この列車の雰囲気を構成することに一役買っているのだろうとも思う。

今朝、早朝の四時に起床した際には雨が上がっていたのだが、自宅を出発する少し前から小雨が降り出した。今回の旅行においては、折り畳み傘を使うことはほとんどないと思っていたのだが、出発の時にそれは活躍することとなった。雨と言っても激しいものではなく、小雨程度であったことは幸いだ。自宅からフローニンゲン中央駅に向かうまでの道中、自分の意識は内側に向かっており、これから始まる旅について、そしてその瞬間の自分の思考や感情に集中していた。

予定していた時刻に駅に着いた私は、すぐに列車のチケットを購入し、チケット売場のすぐそばにある売店で水を購入した。その水を持って列車に乗り込み、今列車がスキポール空港に向けて出発した。

ちょうど私の反対側の席には、私よりもふた回りほど大きなスーツケースを携えた中年の女性が一人座っている。その女性は小雨の降る窓の外の景色を眺めている。私も自分の席側の窓の外を眺めてみた。そこにはいつも列車に乗る際に眺める、オランダの長閑な田園風景が広がっていた。

フローニンゲンから出発する際には、この景色を眺めてくつろぎ、フローニンゲンに戻ってくる際には、この景色に落ち着く。この景色の魅力はそうしたところにあると言えるだろう。これからスキポール空港まで、二時間ほど列車に揺られる。その際には、日記を書き留めたり、作曲上の写経実践を行う。

日記の執筆と作曲実践の往復運動をこの旅でも行っていく。もはや日記と作曲は自分の人生そのものと不可分のものなのである。それらから一瞬たりとも離れたくはないという思いが湧き上がる。

私はもう自分の言葉と自分の音を通じてこの世界を生きたいのだと思う。自分の言葉と自分の音を求める旅はまだまだ続く。そして、その旅に終わりが無いことをもはや知っている。

自宅から駅に向かって歩いている最中、今朝方の夢について思い出していた。それは早朝に書き留めた、囲碁の巨匠と囲碁を打つものである。碁盤上で私たちは確かな対話を行っていた。いや、それは碁盤上というよりも、各自が持つ囲碁宇宙とそれらが生み出すさらに巨大な囲碁宇宙の中での対話だったように思う。

その時の情景を思い出しながら私は、夢の中の巨匠と自分は、お互いに「神の一手」を求め、一手一手を通じた対話を通して、共通の神の一手を求めていたように思えたのである。そして私は、現実世界の自分においては、ひょっとすると、「神の一音」なるものを求めて日々精進しているのかもしれないと思わされたのである。

それは自分にとっての神の一音であればいい。誰しもおそらくそうした一音を持っており、自分なりのそれを見出した時、それらの音は共鳴を始め、それが共通の神の一音になりうるのではないかと思わされたのである。今朝方の夢はそのようなことを私に教えてくれた。スキポール空港に向かう列車の中:2019/4/26(金)08:01

気がつけば起床から四時間ほどの時間が経ち、時刻は午前八時を迎えた。小雨も弱まり、雨が止むのはもうじきだろう。幸いにも、午後に到着するバルセロナの天気は晴れであり、ホテルのチェックインを済ませたら、早速バルセロナの街に繰り出し、散歩を楽しみたい。時間的にゆとりがあるだろうから、ガウディの建築を二、三見て歩きたいと思う。

今、フローニンゲン駅の隣駅であるアッセンに到着した。次は、オランダ北部の中規模の町ズヴォレに到着する。ズヴォレというのは音楽的に意味のある町だということを先日知った。詳しくは覚えていないが、中世の時代にドイツから音楽家がズヴォレの町にやってきて、この町の教会音楽を発展させていったということを先日知った。そのため、フローニンゲンと同じく、ズヴォレには立派な教会がいくつもあるらしい。そのような特徴を持つ町の駅をこれから通過していく。

ズヴォレの町にはこれまで三回ほど訪れたことがある。ズヴォレには移民局があり、そこでビザ関連の様々な手続きを行った。この夏にオランダで起業家ビザを取得する際にも、おそらくズヴォレの移民局に一度は訪れることになるだろう。そのようなことを考えてみると、やはり私はこの国では移民なのだ。

欧米での生活も八年目を迎えようとしており、欧州での生活が三年目を迎える前あたりで、以前まで感じていた異邦人性が溶解していったのを覚えている。今は母国にいても、外国にいても、ただ自分自身がそこにある。あるいは、自分自身という認識すらも溶解して、一人の人間がただそこにいるというシンプルな感覚がするのである。

こうした感覚的な変容が起こるとは予想もできなかったことであり、またこの感覚もそれが実際に生まれ出て来なければわかりようのないものだということがわかる。人は発達を遂げていくと、世界認識が変容すると言われているが、それは世界を見通す力が変容するのみならず、感覚の種類と質までもが変容するのだということが改めてわかる。

今の自分には、再び新たな感覚の土壌が開かれ始めていることがわかる。そうした感覚を育み、沃野に変えていくこと。そのためには、毎日をいかに生きるかということが重要になり、今このようにし

て行なっている旅もまた、感覚的土壌を耕すための最良の肥やしになるだろう。今回の旅を通じて、また一つ感覚的平野が新たに切り拓かれていくことを期待したい。

列車はゆっくりとオランダの田園風景の中を走っていく。幸いにも小雨が止み、静かな朝の世界が広がっている。放牧された馬や羊たちが草を美味しそうに食べている姿が見える。彼らのように、生きることのシンプルさの中で生きること。日々の一挙手一投足の中に喜びの萌芽を見て取り、その喜びを通じて生きること。

たった今、車掌と挨拶を交わし、チケットを受け渡しするというそのシンプルな行為の中に生きる喜びを見出すこと。それができないのであれば、人間として真に生きていない。人は生きることの喜びを、何か特別な行為の中に見出そうとしがちである。だが実際には、生きる喜びというのは、何か特別な行為の中にあるのではなく、生きるという全体の中に絶えず様々な形で無数に存在しているのだ。スキポール空港に向かう列車の中:2019/4/26(金)08:19

4246.【バルセロナ・リスボン旅行記】スキポール空港に向かう列車の中で振り返る

今朝方の夢の続き

まだバルセロナにも、そしてアムステルダムスキポール空港にさえ到着していないのに、今日は随分と日記を書き続けている。自分の人生が水の如く流れゆく形で進行しているのと同様に、言葉が水の如く生み出されていくかのようだ。

スキポール空港に到着するのは9:55とのことであるから、あと一時間半ほどである。この日記を書き終えたら、作曲上の写経実践に励みたい。持参したBOSEの小型スピーカーをPCと耳に挿入し、過去の偉大な作曲家が産み出した曲の譜例から、彼らの音楽宇宙を再現し、実際に自分の手を動かしながらそうした宇宙を創るという経験を追体験していく。これを毎日、これから何年間も行っていく。いや、自らの生涯を閉じるその瞬間までそれを行ってもいいかもしれない。

起床してから四時間半ほどが経ち、なおかつ今は自宅ではなく、スキポール空港に向かう列車の中にいるのだが、今朝方の夢の続きを思い出している。夢の中で私は、実際に通っていた小学校にいた。そこの子供たち、より具体的には小学三年生の男の子たちの髪の毛が白髪になっていた

場面にはついては早朝に書き留めていた。その後、私は男の子たちと別れ、靴箱を後にし、校門の方に向かっていった。

そこで小中学校時代の男友達(KM)と小中高が同じだった女友達(KF)と遭遇し、三人で一緒に帰ることにした。校門を出たところには空き地があり、その前を歩いて歩いていると、私はまだ歩き始めてすぐにもかかわらず、突然疲労感に襲われた。

全身がだるいというのではなく、なぜか足が重くなり、足が前に進んでいかなくなってしまったのだ。すぐに私は、二人と一緒に帰ることはできないと思い、二人には自分を置いて先に帰ってもらうようお願いをした。二人は少し心配そうに私の方を見て、静かにその場を後にした。その場に残された私は、本当に足が一步も前に出ないような状態になっており、その場にしゃがみ込むしかなかった。

なぜだか私はランドセルを背負っており、それを地べたに置いて、ランドセルを枕代わりにして、歩道の上で寝っ転がることにした。足を自分の心臓よりも高く上げ、足の疲労を取ろうと試みると、それがうまくいき、徐々に自分の足が軽くなるのがわかった。そこで私は、いったん学校に引き返し、母に車で迎えに来てもらおうと考えた。学校へ引き返してみると、時刻はすでに夕方になっており、辺りは暗くなっていた。

そして学校の校門を抜けてみると、そこが大きな駐車場になっており、様々な路線を走るバスがたくさん停まっていた。私は、母に迎えに来てもらうのではなく、バスで帰ることもできるなと思ったが、どのバスに乗って良いのかわからず、また出発時刻も不明であったから、やはり校内の電話を使って母に迎えに来てもらおうと思った。

先ほどまでは小学校だと思っていたその場所は、いつの間にか大学のような雰囲気になっており、立派なカフェテリアがそこにあった。カフェテリアに入ってみると、そこには同学年の友人や後輩たちがいながらも、見知らぬ学生たちが多くいた。

名前のわからない人たちがいるというのは、まさに大学の人間関係と同じであり、そこはやはり大学なのだなと思った。すると、小学校時代の男友達の一人が私に声をかけてきて、これからクラスコンパがあると言う。クラスコンパというのはまさに大学に入学して初めて経験したものであり、それは懐か

しく思ったが、私はそうしたコンパに参加するのがあまり好きではなく、自分の勉強を優先させたいため、参加を断った。すると彼はスッと消えた。

私はもう暫くこのカフェテリアで休憩しようと思い、何か飲み物でも飲もうかと思った。ふと気がつく、いつもであれば飲まないであろうレモネードを左手に持っており、それを持って空いている席を探した。ちょうど近くに、小中高時代の友人が三人(TO & HY & SS)ほどいて、彼らと話をしながら休憩しようと思った。その前に、レモネードが入った柔らかいプラスチックの容器の蓋を取りに行き、その蓋をしようと思ったら、サイズが合わずに手こずった。

すると私は飲みかけのレモネードの残りを全てこぼしてしまい、地面にこぼれたそれを紙ナプキンで拭き取り、そこからは水を飲むしかないと思った。そこで夢から覚めた。スキポール空港に向かう列車の中:2019/4/26(金)08:41

4247.【バルセロナ・リスボン旅行記】晴れ渡るアムステルダムの上空から

今、バルセロナに向かう飛行機がアムステルダム上空の空に飛び立った。早朝の天気とは打って変わり、現在のアムステルダム上空の天気は非常に良く、青空が広がっている。

これからおよそ二時間後に到着するバルセロナの天気も良好であり、午後の三時半あたりにホテルのチェックインを済ませ、自室に荷物を置いて一息ついたら、バルセロナの街に繰り出そう。散歩をしながらバルセロナの街並みを堪能し、その雰囲気を感じたい。

数ヶ月前までスペイン・ポルトガルと自分との距離を感じていたのだが、それらの国は一気に私に接近し、先日突然旅の計画を思いつき、それを実行して今私はバルセロナに向かっている。

今日の夕方にバルセロナの街を散歩する際には、この街が生んだ建築家のガウディの建築物を主に見物する。しかし、ガウディの建築だけに意識を向けていてはならず、絶えず自分の意識を多様な存在者を開いておこうと思う。そうでなければ、この街が私にもたらしてくれる諸々の刺激及び促しを真に享受することはできないだろう。

バルセロナの街を思い思いにのんびりと散歩したい。バルセロナの街にはどのような時間が流れているのだろうか。バルセロナという街は、一体どのような呼吸をしているのだろうか。そして、どのような音楽を奏でている街なのだろうか。街だって人間と同じく呼吸をし、歌を歌うのだ。それに気づけない愚かな人間にだけはなりたくない。

先ほどまで空港のラウンジにいた。ここでもプライオリティーパスは活躍をし、このカードがあれば、世界の空港の指定ラウンジを無料で利用することができる。更新は一年間隔であり、先日母が日本から今回の旅行に間に合うように迅速に郵送してくれた。そのおかげで、アムステルダム空港では十分にくつろぐことができ、簡単に二曲ほどのスケッチを描くことができた。

今日から旅行が始まるということで、今朝は残っていた果物や野菜を食べ、空港のラウンジでもフルーツを食べた。今回の旅行中は、朝に果物を食べ、夜にオーガニックサラダをメインにした料理を食べるという生活を送っていく。

バルセロナとリスボンの両都市において、すでにオーガニックレストランを何軒か見つけており、オーガニックスーパーも何店か見つけている。今日はガウディの建築物を見学し、その帰り道にバルセロナ市内のオーガニックスーパーに立ち寄り、三日分か四日分の果物を購入する。

フローニンゲン駅からスキポール空港に向かう列車の中で、作曲上の写経実践をし、この実践がもたらす恩恵に気づいてばかりである。譜例をキーボードを用いて再現し、それを再生して実際に音を聞いた後に、その続きの音楽を自分の頭の中で鳴らしてみるという工夫をしている。

基本的にたいていの曲は問いと答えの応答によって構成されており、自分なりに良い問いと良い応答とはどのようなものなのかの基準を確立していくことに努めている。譜例の中には、問いだけが抜粋されているもの、逆に応答部分のみが抜粋されているもの、はたまた問いと応答がセットになっているもの等々、ヴァリエーションがあり、それらを参考にしながら自分なりの応答基準を練り上げていく。

譜例を作曲ソフト上に再現し、それを実際に再生して自分の耳で聞いてみると、耳を鍛錬する良い訓練になる。私は30歳になるまで音楽に意識的に触れたことはなく、耳の訓練などしたことはないのだが、ここから意識的にどこまで自分の耳を鍛錬できるのかに挑戦してみたいと思う。そのために

は、実際に音を出し、自分の耳を使って音を聴くということが何よりも大切になる。ここで鍛えていくべき耳は、身体意識の階層構造に対応したものになる。

つまり、グロスの耳 (gross ears)、サトルの耳 (sutble ears)、コーザルの耳 (causal ears) は最低限鍛えていくべき耳の階層構造である。高次元の耳にまで焦点を当てて自らの耳を涵養していくのみならず、自分の色彩感覚、形象感覚、味覚、触覚などを活用して、聞いた音に色、形、味、触り心地などを見出すようにする。こうした鍛錬を続けていけば、音楽を創出する際の自分独自の感覚が涵養されていくはずであり、究極的な音に近づいていくことができるのではないかと思う。アムステルダム上空:2019/4/26(金)13:05

4248.【バルセロナ・リスボン旅行記】刹那的な出会いへの感謝の表明

バルセロナに到着するまであと一時間半ほどの時間がある。そうした時間的ゆとりがあることが嬉しく、その間に私は日記の執筆、日記の編集、作曲上の写経実践に励むことができるだろう。

言葉を紡ぎ出すことと、音を紡ぎ出すことしかない人生。本当にそれらしかない人生であり、逆にそれらしかないということが、この人生に全てあるということを完全なまでに担保している。

アムステルダム空港を出発した飛行機は、順調にバルセロナに向かっている。私はいつも、欧州国内の移動においては、移動時間が短いため、基本的にエコノミークラスに乗るようにし、日本に一時帰国する際は必ずビジネスクラスに乗るようにしている。そのため、欧州国内を移動するときには、プライオリティーパスを用いて、アムステルダム空港のAspireラウンジを活用し、日本に一時帰国する際にはKLMラウンジを活用するようにしている。

本日、セキュリティを速やかに抜けた私は、Aspireラウンジのある階に向かってみたところ、これまでであったはずのAspireラウンジがないことに気づいた。見ると、工事をしているようであり、AspireラウンジはKLMラウンジのある階よりも一階上に新しく設けられていた。

新しい場所に移ったAspireラウンジは大変綺麗であり、以前の照明は意図的にか少し薄暗かったのだが、新しいラウンジは外の景色が見られるように開放的な大きな窓が設けられており、ラウンジ全体がとても明るかった。また、個室ブースのような席がラウンジの壁際に何席か設けられており、

今回私はそのうちの一つを使った。楽譜を広げるスペースが十分にあり、持参したハイドンの楽譜を参考にしながら作曲実践を行うことができた。

仮に短い時間であっても、楽譜を広げるスペースがあれば、そこで曲のスケッチでもいいので、内側から形となって現れようとする音楽を曲の形にしていきたい。とにかく大量のスケッチを描いていくことを意識する。

スケッチを描く訓練を積み、先ほどラウンジで描いたスケッチを時間的にゆとりのあるホテルの自室で一応の完成形にしていく。今の私はこのように、楽譜とPC、さらには作曲ノートの三点がなければ作曲ができないのだが、理想的には、それらの道具がなくても、裏紙と鉛筆だけで曲をスケッチするような能力を身に付けたい。そのためには、地道な学習と地道な実践の双方を継続させていく必要があるだろう。本当に理想は、いついかなる場所においても曲を生み出すことである。

詩人や俳人が、どこでも詩や俳句を詠めるように、どこでも曲が作れるようにしていく。例えば、今座っている飛行機の席からトイレに行くまでの感覚を曲にしていくことや、これからバルセロナに降り立ち、街に降り立った瞬間のその感覚を曲にしていきたい。

この人生において自分を捉えるありとあらゆるものを曲の形にしていくことができればと思う。この世界と自分の人生が交わる交点で生まれたもの、すなわち、自分という一人の人間がこの世界で生きているという証、あるいはこの世界のある瞬間において生きていたという存在証明を行うために曲を作っていく。

曲の形になろうとするものは、自分の内側だけから生まれているわけではないのだ。私は、自分の内側からしか生まれ得ないものを形にしようなどとは思っていない。私が形にしようとしているのは、この世界と自分との固有の縁によって生まれた刹那的な出会いなのだ。そうした出会いがあったということを風化させないために、そうした出会いがあったということへの感謝の念を表明するために、これから私は精進を続け、自分なりの曲を作っていく。アムステルダム上空:2019/4/26(金)13:23

4249.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナでの音楽的出会い

時刻は午後の七時半を迎えた。バルセロナ滞在の初日がゆっくりと終わりに向かっている。

午後二時半にバルセロナ空港に無事に降り立ち、そこから宿泊先のホテルがあるBarcelona Sans 駅に列車で向かった。飛行機から降りて空港駅まで少しばかり距離があるように感じたが、無事にすぐに見つけることができた。

今日の天気がすこぶる良かったためか、空港駅周辺の雰囲気は常夏のような陽気さを感じさせてくれた。不思議なことに、やはりアムステルダムでは感じられないものがバルセロナにあることがすぐにわかった。

どの街にも固有の魂が宿っており、それがこうも異なる感覚を自分に呼び起こしてくれることに改めて驚く。土着神というのは本当に存在しているのだ。バルセロナに住む土着神の性格は、間違いなく陽気であろう。今回初めてバルセロナに足を運んだのだから、そんなにすぐにこの街に住まう神の性格などわかりようはないと思われるが、だが間違えようのないものも確かにあるのではないかと思う。

空港駅に到着し、午後の太陽の光がプラットフォームに差し込み、その光を浴びていると、この街の土着神の陽気さがやはり滲み出ていたとしか言いようがない。バルセロナ国際空港から市内に向かう駅構内で迷うことはなく、すぐに予定通りの列車に乗ることができた。列車に乗った私は、列車が出発するまでの時間を使って、過去の日記を少しばかり編集していた。いざ列車が出発する頃にはちょうど編集が終わり、仮にそれが終わってなくても、列車が動き出したら必ず窓の外の景色を堪能しようと思っていた。

この南ヨーロッパのスペインという国は、やはりオランダと異なる。それは肯定的な意味で異なるのだ。

列車が動き出してしばらくすると、車内から陽気な音楽が聞こえ始めた。ラテン系の陽気な音楽が鳴り始め、最初それはこの列車で流されているものかと思った。しかしどうやらそれは、乗客の誰かが演奏しているものだとわかった。比較的若そうに見える大道芸人風のスペイン人の二人の男性が、音楽の演奏をしながら車内をゆっくりと歩いている。

乗客も皆興味津々の顔をして、中には手でリズムを取る乗客がいて、実際に私も思わず手でリズムを取っていた。「思わぬ形でスペインの音楽と出会うことができた」と私はすぐに思った。ラテン系の

陽気なリズムで刻まれる音楽が、私の内側の中に流れ込んできて、自分の内側にある何かを刺激していた。

異なる土地の、異なる文化で育まれる音楽。この世界には本当に、土地の数だけ固有の音楽が存在するのだということを改めて知って嬉しくなった。そしてその気づきは即、この世界には人の数だけ固有の音楽が存在することにも気づかせてくれたのである。

私は二人の男性がゆっくりと遠くの車両に向かって行く後ろ姿をしばらく眺めていた。そしてそこからは、彼らが奏でる音楽が聞こえなくなるまで彼らの音楽に耳を傾け、刺激を受けた自分の内側のリズムを刻みながら、窓の外に広がるバルセロナの景色を眺めていた。

ホテルの最寄駅に到着するまでにはそのような出来事があった。この音楽体験は、スペイン人固有の音楽に触れる一つの小さな原体験のようなものになりうるかもしれないという予感がある。彼らの音楽を聴いている最中の自分の胸の高鳴りがその予感の確からしさを物語る。バルセロナに到着してすぐに、こうした音楽的な歓迎があったことは本当に喜ばしいことであった。バルセロナ:2019/4/26(金)19:58

4250.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナの街がもたらす陽気さと歓喜

バルセロナ滞在の初日が、なんとも言えない幸福感と共に終わりに近づいている。時刻は午後八時を迎えたが、バルセロナの太陽もフローニンゲンの太陽と同様に、まだ沈む様子を見せていない。

今回六泊ほどバルセロナに滞在することになっており、宿泊先のホテルは、Barcelona Sansという比較的大きく、そして綺麗な駅の眼と鼻の先にある。幸いにも駅から外に一步出た瞬間に、宿泊先のホテルの姿が見えたため、迷いようがなかった。やはり空港から直結している駅近くのホテルに今回宿泊することにして正解だった。

これまで欧州内を旅行する際にもなるだけそのように配慮しながらホテルを選んでいるつもりなのだが、時に地図を見ても迷ってしまうことがあり、今回は相当に駅に近い場所を選んだ。ホテルに到着し、すぐに受付でチェックインをした。受付のスペイン人の男性はとても親切であり、私が日本人

であることがわかると、日本語で少し挨拶をしてくれた。私も挨拶程度の最低限のスペイン語をその場で覚え、早速受付で何度かそれを使わせてもらった。

部屋に到着してすぐに荷物を降ろし、今回の宿泊先のホテルにして正解だったと思った。デスクのスペースが広く、そのおかげで楽譜を広げながら作曲することができる。フローニンゲンの自宅の書斎の机よりも幅が広く、このデスクに随分と多くのものを置くことができるのは有り難い。三月にパリに足を運んだ際に宿泊したホテルのデスクは手狭であり、少し窮屈な思いをしながら作曲をしていたのを覚えている。

今回の宿泊先のホテルのデスクであれば、何の心配もなく思う存分作曲実践と写経に打ち込めそうである。それが何よりも有り難い。リスボンで滞在するホテルに関しても、空港直結のメインの駅から眼と鼻の先の場所にし、デスクが広く、かつ湯船があるホテルに滞在することになっている。

午後の四時前にホテルの自室に到着した私は、一息ついてからガウディの建築を見に行こうと思っていた。だが、足の三里辺りに筋肉痛があることがわかり、今回のバルセロナ滞在は比較的毎日余裕があるため、ガウディの建築物を巡ることは明日以降にした。

明日は、ホテルから近いカタルーニャ美術館だけに訪れる予定であり、夕方からは時間があるであろうから、明日の夕方にガウディの建築物を二、三見て、その足で街の中心部にあるオーガニックレストランで夕食を摂ろうと思う。

今日はガウディの建築物を見に行くことはしなかったが、その代わりに、ホテルの近くを散策し、目をつけていたオーガニックスーパーに足を運んだ。ホテルから出てすぐに、バルセロナに漂う陽気さに大変心地よくなった。これはオランダではあまり味わえない感覚質の陽気さであり、ここに両国の土着神の性格上の違いを感じ取ることができる。

まだ滞在初日であり、しかも数分ほどしかバルセロナの街を歩いていなかったのだが、私はすぐに、仮に陽気さの中で曲を集中的に作る時期を設けるのであれば、その期間だけバルセロナに居住するのも悪くないと思わせてくれるほどであった。とにかく、太陽の光を存分に浴び、こうした陽気さに浸ることが久しぶりであったため、私は自分でもわかるほどに上機嫌な中で散歩を楽しんでいた。

オーガニックスーパーでは、当初の計画通り、果物を十分に購入し、今日はイチゴパック、赤々としたリンゴ一個、バナナ一本、そしてフローニンゲンから持参したアーモンドとくるみを夕食として食べた。明日の夕食は、上述の通り、事前に調べておいた三軒のオーガニックレストランのうちの一軒に足を運び、良質な夕食を味わいたいと思う。バルセロナ:2019/4/26(金)20:17

4251.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在初日に見た不思議な夢

バルセロナ滞在の二日目の朝を迎えた。朝と言っても、起床したのは午前二時前である。バルセロナに到着して怒涛のように流れ込んできた種々の感覚によるせいかな、それが一種の興奮状態を生んでいたようなのである。私自身はそれを自覚しておらず、就寝前も至って落ち着いていたのだが、私の無意識が全くもってそうではなかったようなのだ。

就寝したのはいつもと同様に、午後10時であり、そこから四時間ほどの睡眠を取った。昨日の夕食は果物とナッツ類だけであったから、消化にエネルギーを全く使わなくてよかったことも短眠を導いたのだと思われるが、やはり上述のように、バルセロナに足を踏み入れた瞬間から内側に流れ込んできた激しい地下海流のような感覚による影響を見逃すわけにはいかない。今日はとりあえず、このままの状態です早朝の諸々の活動を行い、午前中に観光に出かける前に、30分ぐらい仮眠を取るかもしれない。

バルセロナ滞在の初日の夜に見ていた夢、つまりつい先ほどまで見ていた夢について書き留めておきたい。またしても、囲碁に関する夢だった。いったいなぜ、ルールも知らない囲碁の夢が出てくるのか定かではない。確かに、囲碁と作曲に似たような側面があることは確かだが、このように連続して囲碁に関する夢が出てくるのはとても不思議だ。

まさかとは思いますが、自分はこれから囲碁を始めるようなことになりはしまいか。さすがに今のところそれはなさそうだが、作曲上との関連から囲碁の世界に関心を持つことは十分にあり得るし、それが起こることは領域を越境し、異なる領域から学ぶという点において非常に望ましいだろう。

今朝方の夢の中で私は、囲碁の守護神のような役割を担う存在だった。端的には、プロ棋士の対局を後ろで見守る存在であり、彼らが何か不正や悪意ある一手を打った場合には、それを一刀両断し、彼らを成敗するような役割を担っていた。

起床してからつい先ほどまでは、夢の断片として立ち現れた様々な場面を覚えていたのだが、起床してすぐにメモを取ることを忘れており、顔を洗っていると、記憶までもが随分と洗い流されてしまったようだ。その他に覚えていることと言えば、私は囲碁の守護神としての役割を真摯に受け止め、それ以上にならないほどの正義感を持っていたように思う。それが逆に、時に激しすぎるとも思えるような成敗の仕方を棋士たちにしていたように思う。

正義の一太刀、ないしは正義の鉄槌を振り落とすようなことを相当に激しく行っていたように思う。10時に就寝してから、12時に一度目を覚まし、ちょうどその直前に、夢の中の私はそうした激しい行動を取っていた。

残念ながら、これ以上はどうしても思い出すことができない。ひょつとすると、午前中にホテルを出発する前に仮眠を取る際に、またビジョンとして何かを見るかもしれないので、それについては文章に書き留め、明日の朝方に夢を見るのであれば、それは起床してすぐに裏紙にメモしておきたいと思う。

バルセロナ滞在の二日目が、ある不思議な夢から始まった。そして今日という一日が、また別の夢の素材になっていき、現実と夢が動的に交差し始める。バルセロナ:2019/4/27(土)02:15

No.1893: In a Refreshing Morning in Barcelona

I'll visit the Picasso Museum in the afternoon and the Palau de la Música Catalana in the evening to participate in a classic concert. I'm convinced that today will also be wonderful. Barcelona, 07:24, Sunday, 4/28/2019

4252.【バルセロナ・リスボン旅行記】自らの人生を生きる作曲

今朝はフローニンゲンで迎える朝とまるっきり異なる点があることにすぐに気づいた。端的には、ここバルセロナの朝には、小鳥の鳴き声が聞こえてこないということだ。もちろん、バルセロナのもっと落ち着いた郊外などに行けば、小鳥の鳴き声と共に目覚めることが可能なのかもしれないが、今の宿泊先のホテルの周りには小鳥がいないようだ。そもそも、今回はバルセロナ市内の中でもかなり大き

な駅のすぐ近くのホテルに宿泊をすることにしたのだから、それもまた仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

駅からのアクセスと中心街へのアクセスの良さを優先させるのか、それとも小鳥たちの鳴き声が聞こえるような静けさを優先させるのか、その辺りのトレードオフ関係は非常に難しいと思わされる。現在の宿泊先のホテルは、空港へのアクセスが良く、バルセロナの街の主要な観光場所は全て歩いていけるような場所にあることは大変望ましい。だが繰り返しになるが、メインの駅に近いということが、深夜まで交通量の多さを生んでおり、就寝してからも車の音が止むことはなかった。

午前二時半に近づきつつある今時点においても、窓の外からは小さな騒音が絶えず聞こえる。確かにそれは気にするほどのものではないのだが、いかんせんフローニンゲンの自宅の周りの環境が絶えず静謐さに溢れているものだから、その対照的な特性が際立っているのだろう。

残念だが、バルセロナ滞在中の朝に小鳥の鳴き声を求めることはせず、その代わりこの陽気な街の朝には、何か別のことを期待しようと思う。それが何かはまだ見い出せていないが、きっと私を惹きつける何かがこの街の朝にあるはずだ。

今日はこれから、いつものように早朝の作曲実践を行う。その後、作曲上の写経実践を行っていきたい。作曲実践を行う際には、持参したハイドンの楽譜を参照して、まずは長調の曲を作っていく。その際には、教会旋法の幾つかの種類を活用し、重力の上げ下げを行い、同時に教会旋法の活用によって特殊な色をつけていくイメージを持つ。

一つの教会旋法には固有の重力と色があり、それは調性のある曲と組み合わせることで、また独特の重力場と色を生み出すように感じる。それとこれからの作曲実践では、写経実践を通じて得られた気づきや発見事項をそこに活用していくようにしたい。つまり、写経実践での学びを実際に曲を作るという行為の中に還元していくのである。こうしたことをしなければ、二つの実践が分断されたものになってしまう。

二つの実践を常に架橋するように意識することによって、双方の実践から得られるものもより豊かになっていき、その結果として、自らの作曲技術が高まっていくのだろうと思われる。ハイドンに範を求めて一曲、あるいは二曲作ったら、写経実践を行う。

今後の理想としては、実践中に自ら再現した曲をその場で何度も繰り返すことによって、実際に音を出さなくても譜例から音が頭の中で流れるように訓練をしていく。これはすなわち、これまで活用してこなかった脳の領域を活性化させていくことを自らに課すことを意味するだろう。自分の脳を作り変えるようなことが、今自分自身に要求されていることの一つにあるように思う。作曲実践を通じて、自分が毎日少しずつ様々な側面において変化しているのを実感する。

自分にとって、そして自分の人生にとって、作曲実践とはなんなのだろうか。自分が作曲実践を行い、作曲を通じて自らの人生を生きているのではなくて、作曲が私の人生を生きているように思えるような感覚が広がっている。バルセロナ:2019/4/27(土)02:31

No.1894: A Greeting of a Little Bird

Happily, I could hear the twitter of a couple of little birds this morning. It was their greeting for me. Barcelona, 08:22, Sunday, 4/28/2019

4253.【バルセロナ・リスボン旅行記】変数の変化と友人のブログより

起床してから一時間ほど経ったが、それもまだ午前三時にならないというのが興味深い。一日一食生活—昨日は早朝の出発前に軽い食事をし、空港のラウンジでもフルーツを食べたが—を徹底させていくと、これまでのように惰眠をむさぼる必要がなくなり、良質な睡眠を必要な分だけ取れている感覚がある。まさに食べ物と同様に、質の悪いものをどれだけ多く確保してもほとんど意味はなく、良質のものを適当な量だけ確保することが睡眠においても重要なのだろう。今の私は、そうしたことが睡眠においても実現され始めている。

明らかに睡眠時間が減ったのだが、日中の活動力は落ちることはなく、むしろ知的生産に関して言えば、それは驚くほどの高まりを見せているように思う。日記の執筆、読書、作曲実践、日本企業との種々の協働プロジェクトなど、日々私が取り組んでいる一つ一つの事柄に対する活動力は高まり、そこでの生産も高まりを見せているように思う。もちろん重要なことは、兎にも角にも継続であり、睡眠に関しても無理にその時間を減らしてはならない。今は食生活の改善によって、自然と睡眠時間が減り、それでいて良質な睡眠が確保されるようになったのであり、食生活を見直すことをせずに、いきなり睡眠時間の変数だけを操作してはなるまい。

私たちの心身の状態というのは、単に一変数を動かしてどうこうできるような単純なものではないのだ。ただし、心身の状態を大きく左右する主要な変数というのはいくつか絞ることができ、私の場合で言えば、それは食生活だったというだけに過ぎない。

睡眠時間が変化したというのは、食生活という重要な変数を動かしたことによって生じた可能性が極めて高く、今度は睡眠時間の変化が、他の変数の値を動かすことになるかもしれない。自分の心身の状態、および人生を構成し、人生を駆動させていく変数の種類およびそれらの状態については、今後も意識を向け続け、観察を継続していこうと思う。

私は普段、できるだけ活字を読むことに関しては、英語空間にいるようにしているのだが、時に和書を読んだりする。だが、基本的に毎日ウェブ上で日本語のニュースを見たりすることはなく、つい最近日本の年号が変わるらしい(すでに変わった?)ことを知った。

以前我が国の消費税が上がった際には、増税後一年ほど経って銀座のメガネ屋でメガネを購入した時に初めてそれに気づくほどだった。だが最近の私は、二人の日本人の友人のブログをほぼ毎日読むようにしている。二人のブログは毎日更新されており、多くの気づきと励ましを私に与えてくれている。二人のブログの面白さは、それぞれに固有の知見があるだけではなく、最も重要なのは己の文体を持って文章が書かれている点にある。

味も素っ気もなく、その人自身が現れてこない腑抜けた文章が多い世の中において、二人の文章は自らの文体によって自己が全面的に前に出てきている。そうした文章は、何が書かれていても面白いというのが素直な感想である。

先ほど、午前三時を迎える前に、バルセロナのホテルの一室の中で、二人のブログ記事を読んでいた。ちょうど一人の友人とは一昨日に交換セッションをしており、その時の話題について触れられていた。セッションを開始した時の私の声の色が「浅縹(あさはなだ)」色だというのがその方の指摘であり、大変興味深く思った。その色は青みがかっているということをセッションの最中に聞いていたのだが、改めて浅縹という色を検索してみたところ、それはなんと、私が先日購入した急須の色と似ていたのである。もちろん、急須全体がそのような色をしているわけではないのだが、急須の中で目のつく模様がそのような色をしていることをふと思い出したのである。

実家の父の本棚に、色と深層意識との関係に関する本があり、それを過去に数回ほど読んだことを覚えている。今度実家に帰ったら、またその書籍を読み返し、色と深層意識との関係について理解を深めていきたいと思う。それは、今後の夢の観察にも有益であろうし、深層意識と密接に関わった作曲という創造行為においても何か有益な観点を提供してくれるだろう。それにしても、色に「浅縹」というような名前が付いていたとは・・・音の世界も非常に奥が深い。バルセロナ:2019/4/27(土)
03:08

4254. 【バルセロナ・リスボン旅行記】 スペインの音楽とバルセロナで行う監訳書のレビュー

気がつけば、時刻は午前六時を迎えた。今朝は午前二時前に起床したこともあり、一曲ほど作ってから先ほど仮眠を取った。これで今日の日中の活動に支障はないだろう。

バルセロナの日の出は、フローニンゲンのそれより遅いようだ。両都市において時差は全くないのだが、緯度が随分と違うからだろう。日の出の時間はフローニンゲンの方が随分と早く、この時間帯はもう随分と明るくなっている頃だ。

小鳥の鳴き声を毎朝聞き、太陽が昇る姿を朝早くに拝んでいる生活と、バルセロナ滞在中の今の生活は随分異なることに気づく。もちろん、バルセロナという街が与えてくれるものは計り知れないかもしれないが、やはり私にとってはフローニンゲンというのは特別な街なのだということがわかる。

昨日からバルセロナに滞在しているということもあり、昨夜よりスペインの作曲家が作ったピアノ曲集を聞いている。六時間ほどのアルバムと七時間ほどのアルバムを見つけ、今は六時間ほどのアルバムを繰り返し聴いている。バルセロナに滞在している期間中は少なくとも、それらのアルバムを繰り返し聴き、スペインの音楽を心身の奥深くに浸透させていくように努めたい。それは自らの意思で努めていくというよりも、私の心身の素直な要求のようにも思えてくる。

植物の根が地中から水分と養分を吸収するように、そして葉が太陽の光の恵みを享受するのと同じように、スペインの音楽が自然と自分の内側に浸透していくことを願う。今日はこれからもう一曲作り、その後、監訳書の再校のレビューを行う。スケジュール通り、昨日、編集者の方から再校の原稿を受け取った。私から身勝手なお願いとして、もう数日ほど早く再校の原稿をもらえないかと以前にお

願っていたのだが、やはり当初の予定通りとなった。それを嘆いているわけではなく、それでも当初のスケジュール通りなのであるから、ここからまた自分の役割を果たしていただくだけである。

再校のレビューに関しても十分な時間を与えてもらっているが、それは十分すぎるほどであり、バルセロナ・リスボン滞在中の隙間時間を使って集中的にレビューを行っていく。もし仮にこの旅行期間中に終わりそうにないという見通しが生まれた瞬間に、食事を抜くことにする。断食をして、その集中力でレビューを一気に前に進めていく。ただし、そうはならないようにレビューを終えていく工夫と集中をしていきたい。

今回の旅行も、人生における他の旅行と同様に唯一無二のものであり、滞在中の期間は、そこでしか得られないものを得るようにしたいと思う。ここから集中して一曲作ることができれば、レビューに一時間半から二時間の時間を充てることができるだろう。

そうしたレビューをコツコツとここから進めていく。理想はリスボンに行く前にもうレビューを仕上げたしまおうと思っている。バルセロナからリスボンに向かう頃に仮にレビューが終わってれば、その際には、地道に道を歩いてふと振り返ってみたときに初めて自分の歩みに気づくような感覚と同じものが得られるだろう。今回の監訳書の出版、そして今回の旅そのものは、両者が交差し合い、どちらも共に思い出深いものになるにちがいない。バルセロナ:2019/4/27(土)06:08

No.1895: Early Spring in Barcelona

I'll leave the hotel for the Picasso Museum. After that, I'll eat dinner early and participate in a classic concert. I look forward to all of them very much. Barcelona, 11:35, Sunday, 4/28/2019

4255.【バルセロナ・リスボン旅行記】カタルーニャ美術館について

時刻は午前八時を迎えた。今日のバルセロナの気温は、最高気温が17度、最低気温が11度であり、昨日よりも肌寒い。先ほどホテルの自室のバルコニーに出てみたところ、外はとても寒く感じられた。明日はさらに気温が下がり、最高気温は15度ほどになる。数日前までは、明日は午前中に数時間ほど小雨が降る予報だったが、今確認してみると、明日はもう雨が降らないようだ。バルセロナに滞在する六日間は有り難いことに、すべての日が晴れである。

バルセロナに滞在中の全ての期間は、軒並み最高気温が20度以下だが、バルセロナの後に訪れるリスボンも軒並み20度を超える日が続くようである。昨日のバルセロナは、春の陽気に包まれていたが、今日は肌寒く、リスボンでは再び春の陽気を感じられるのではないかと期待する。

今日はこれから、ホテルからほど近くにあるカタルーニャ美術館に足を箱ぶ。美術館の開館は、本日土曜日においては午前10時から午後6時までである。美術館が開館する10時頃にホテルを出発し、そこから休日のバルセロナの街をゆっくりと歩きながら美術館に向かおうと思う。美術館の周りは緑が多いようなので、非常にすがすがしい気持ちになるだろう。

今日の主な予定はこの美術館を訪れるだけであり、午後か夕方からは、バルセロナ市内にあるガウディの主要な建築を見学しに行く。昨日の夕方にもバルセロナの街を少しばかり散歩していたのであるが、バルセロナの家はオランダの家のユニークさもまた一味違う面白さを持っている。両都市の家の作りには飽きを感じさせない面白みがあり、バルセロナのそれは私にとって新鮮なものであり、しばらくはその新鮮さに対して感覚が大きく開かれることになるだろう。

街並みを眺めていると、バルセロナは芸術の街として有名なのがわかる。また実際にガウディ、ピカソ、ミロのような類いまれな芸術家たちがこの街で自らの仕事に励んでいた。そうした巨匠たちの仕事を知る上で、バルセロナにある種々の美術館に足を運ぶことは意義深い。本日訪れるカタルーニャ美術館は、中世から現代までの美術品を収蔵し、非常に幅広い時代のスペイン美術を堪能することができる。

美術館の内部は四つのエリアに分かれており、一つのエリアが一つの美術館に匹敵するような大きさを持っているらしい。当然ながら時代や作風によって自分の関心と合致するものしないものが分かれてくるが、これまでの自分の関心に縛られることなく、四つのエリアをゆっくりと巡っていきたいと思う。いつもの旅と同様に、現地での活動スケジュールは非常にゆったりとしたものであり、一日に一つメインの場所を訪れ、そこで得られたことをホテルの自室に戻って日記や曲の形にしていくことを今日も心がけていく。

朝食として先ほど果物を摂ったが、昼食を摂らないことによって、なんと観光がしやすいだろうか。今日の夕食は、街の中心部にあるオーガニックレストランで食べる予定だ。

今、バルセロナの街に優しい朝日が降り注ぎ始めた。バルセロナ:2019/4/27(土)08:21

4256.【バルセロナ・リスボン旅行記】荘厳な作りと壮観な眺めを誇るカタルーニャ美術館を訪れて

時刻は午後の六時を迎えた。バルセロナ滞在の二日目が、ゆっくりと終わりに近づいていく。

今日のバルセロナの天気は昨日と同様に大変素晴らしかった。起床直後、ホテルの自室のバルコニーに出てみたときには肌寒さを感じ、午前中にカタルーニャ美術館に向けて出発した際にも肌寒さが残っていたのだが、午後からは太陽の日差しのおかげもあり、今日も春の陽気さを感じる事ができた。バルセロナという都市の根底には、陽気さの本質が流れている。そのようなことを思う。

冬のバルセロナを訪れたことはないのだが、仮にいくら寒くなったとしても、この街の根底に流れる陽気さは変わらないのではないかということを感じる。今、ホテルの自室でこの日記を執筆しており、部屋の窓を開けて空気を入れ替えている。窓を開けると、ホテルの周りを行き交う車の音が聞こえてくるが、それはさほど不快なものに思わないから不思議だ。おそらく、バルセロナの陽気さが生み出す心のゆとりがそうした感情を生み出しているのだろう。

今日はカタルーニャ美術館に向けてホテルを出発して以降は何も日記を書き留めていない。今日の振り返りをこれからゆっくりと行い、振り返りが十分にできたら入浴をし、明日の観光に備えたいと思う。

今日はまず最初に、ホテルから歩いて20分ほどにあるカタルーニャ美術館に行ってきた。事前に調べていた通り、この美術館の迫力は尋常ではなく、私がこれまでに訪れた美術館の中でも一、二を争うぐらいの荘厳な作りであった。確かに大きさだけで見れば、ルーブル美術館や大英博物館の方が大きいのだが、美術館に到着するまでの階段と噴水など、もろもろの建築物を総合的に含めると、カタルーニャ美術館の外観の見事さの方に軍配が上がるように思えた。思わず息を飲んでしまうような建築美がそこにあった。

カタルーニャ美術館まで階段を登っていくと、そこからの眺めもまた圧巻であった。バルセロナ市内を一望できる眺めは格別であり、私は美術館の入り口にすぐに向かうのではなく、しばらくそこからの景色を眺めていた。

早朝の爽やかな風を浴びながら、バルセロナの街の表情をしばらく味わっていた。その後、受付に行きチケットを購入しようとしたところ、六つの美術館を割安で回れる美術館パスポートが販売されており、そのうちの三つの美術館には足を運ぼうと思っていたため、それらの美術館でそれぞれチケットを単体で購入した場合の価格を聞いてみると、それらの合計よりもパスポートの価格の方が安かったため、美術館パスポートを購入した。それは本物のパスポートのようであり、期限は一年間有効であり、訪れた箇所にはスタンプが押される仕組みになっていた。それは思い出の品にもなることを考えてみると、30ユーロの価格はとても安く思える。

カタルーニャ美術館に所蔵されている肝心の作品群であるが、一階の中世の時代の作品には二、三ほど足を止めてじっくりと見るものがあり、二階の現代(19世紀から20世紀)の時代の作品には四つか五つほど食い入るように眺める作品があった。

所蔵されている作品の数からすればそれは微々たる数だが、自分の足を完全に止め、じっくりと向き合うことを促してくれる作品がそれくらいあれば十分であった。思っていたほどに美術館に滞在する時間は短く、およそ二時間半弱で納得のいくまで作品を見ることができたため、一度ホテルに戻って仮眠を取って休憩することにした。そのような形で今日の午前中と昼過ぎの時間を過ごしていた。
バルセロナ:2019/4/27(土) 18:54

4257.【バルセロナ・リスボン旅行記】Petit Brotというレストランでの感動的な夕食

時刻は午後の七時半を迎えた。バルセロナの太陽はまだ沈まない。

今日は午前から昼過ぎにかけてカタルーニャ美術館を訪れ、その後一度ホテルに戻って仮眠を取って少し休憩をしていた。その間は特に日記を書くわけでも、作曲をするわけでもなく、ぼんやりと時間を過ごしていた。そのような時間を過ごすことができるのも旅の恩恵の一つであろう。確かに今朝は午前二時に起床していたため、日中に思わぬ疲れが出たのも無理はない。

今夜も早く寝るが、それ以上に睡眠の時間を確保し、早くても四時ぐらいに目覚めるようにしよう。午後十時に就寝し、午前四時に起床するというリズムであれば、何ら問題ないことはこれまでの生活を通じてわかっている。

ホテルでしばらく休憩した後、三時半あたりに、バルセロナ市内をゆっくりと散歩して、目星のオーガニックレストランに向かった。そのレストランの名前は、Petit Brotという。ホテルからそのレストランに向かう街並みは、もうバルセロナ独特のものであった。そこには何とも言えない美が宿っていることが一目瞭然であった。それは市民的な美のだが、それでいて芸術性が高い美でもあるという不思議な美がこの街にある。これまでの自分の旅の経験上、こうした美を顕現させている街はバルセロナ以外にはない。その美をうまく表現できるほどの語彙を私は持ち合わせておらず、バルセロナの街並みが持つ美を表現する語彙が自分の中で醸成されるのは、ここからさらに己を深めていってからになるだろう。

レストランに到着すると、そのレストランはとてもこじんまりとしているのだが、中は清潔感で溢れており、店員も気さくであった。すぐに私は、目当てのサラダを注文し、しかもそれを特大サイズにしてもらった。一応それを一人で食べきれるか確認してみたところ、男性の気さくな店員が「全く問題ないですよ」と述べてくれたので注文することにした。サラダを運んでくれたのは別の女性の店員であり、おしゃれな容器に入った大きなサラダを目にした時、私はその見た目の美しさに感動し、それを言葉に出して表現した。すると店員の女性が微笑み、「ごゆっくり」と述べてくれた。

一口目を口に運んだ瞬間に、全身を駆け上がっていくような感動が呼び起こされ、オリーブオイルと味噌を和えたドレッシングをかけた、オーガニックの様々な野菜を使ったサラダには感動しっぱなしであった。正直なところ、この特大サイズのサラダをもう一つ食べれるほど腹が空いていたのだが、さすがにそれを注文することはせず、その代わりにケールを揚げたものと、様々なスパイスと野菜を粉状にしたもので作られたクッキーのようなものを注文した。

それらもまた美味であり、私は本当に一口目から最後まで感動の中にいた。普段私が自宅で食べているサラダは、今日注文したサラダよりもボリュームがあることを考えると、普段は上質なものを本当に安上がりで食べることができているのだと、改めてフローニンゲンでの日常生活に感謝をした。

フローニンゲンに戻ってからは、数日前に書き留めていたように、野菜をふんだんに使ったサラダを食べる日と、豆腐、味噌汁、さつまいもを食べるといった質素な夕食を食べる日を交互に繰り返すという食生活を実践する。今日の食事は朝に果物を食べ、午後に仮眠を取る前にもリンゴを一個だ

け食べたただけだったので随分と腹が空いていたが、レストランを出る頃には十分満足できた。明日は、当初の予定通り、カタルーニャ音楽堂で17:30から始まるコンサートに参加する。

カタルーニャ音楽堂とこのレストランは近いため、コンサート前に、明日もまたこのレストランで夕食を摂ろうと思う。バルセロナ:2019/4/27(土) 19:45

4258. 【バルセロナ・リスボン旅行記】 くつろぎのバルセロナ

私は旅の最中、基本的に一日に巡る場所は一箇所に留め、慌ただしく様々な場所に次から次へと出かけていくことをしない。今回の旅においてもその方針を採用している。

バルセロナに来てまだ二日目なのだが、もう随分と長くここで生活しているかのようにこの街にくつろいでいる自分がある。よく私は、世界の各地に旅行した際には、観光客のようには見えない雰囲気その街に溶け込んでいるためか、見知らぬ人に道を聞かれたりすることがある。

今日もバルセロナの街を歩きながら、確かに見渡す限りそこは未知な世界なのだが、どうも自分がこの街に馴染んでいる感じがすでにするから不思議であった。結局私は、自分がこの世界のどこにしようが、自分であることができるようになったのだと思う。

自分が自分でとしてそこにあれば、わざわざ自己をその場所に適応させようと意識する必要などないのではないかと思う。自分が自分としてそこにあるというのは、自らの存在が世界と無境界的にそこにあるということであり、そうであれば、適応などという言葉や現象など生まれようがないのだと思う。適応という言葉や現象が生まれるのは、自己とその場所との境界線、つまり断絶がそこにある場合に限るのではないかということが見えてくる。そうしたことを考えてみると、ようやく私は、この世界のどこに旅をしようが、どこで生活をしようが、自らであり続けることができるようになってきたのだと思う。バルセロナの街は、そのようなことを私に教えてくれた。

当初の予定では、明日はカタルーニャ音楽堂で夜に行われるコンサートだけに参加する予定だった。つまり、17:30のコンサートが開始されるまでは特に何も予定はなく、バルセロナの街を少々散歩しようかと考えていた。だが、散歩をするにもほどがあり、しかもここ数日はすでにかなり歩き回っ

ているため、明日はあまり歩き回りたくないというのが正直なところである。そこで私は、月曜日に足を運ぶ予定にしていたピカソ美術館へ明日の昼あたりから訪れ、そこでゆっくりと作品を見た後に、今日足を運んだレストランに行き、夕食を食べ、そこからカタルーニャ音楽堂でのコンサートに参加することにした。

そうすれば、明日は午前中は丸々ホテルで休憩することができ、日記の執筆と編集、作曲実践、さらにはウィルバーの監訳書の再校のレビューを進めていくことができるだろう。そして、4/29に訪れることを予定していたピカソ美術館へ明日足を運ぶことができれば、月曜日は丸々予定がなくなり、その日は完全にオフとし、近所のカフェで創造活動と書籍のレビューに勤しもうと思う。

バルセロナの現地人がカフェでくつろいだり、仕事をしたりすることの中に溶け込んで、私も同じような形で時間を過ごしていく。月曜日も午前中一杯はホテルで過ごし、午後からカフェに行き、そこで仕事に取り組む。そして夕食を、目星の別のレストランで取り、腹ごなしの散歩として、ガウディが建築したサグラダ・ファミリア教会とカサ・ビセンスを見に行ってみようと思う。毎日のんびりとした形で旅を楽しんでいるが、それ以上にのんびりとした一日を月曜日には過ごそうと思う。バルセロナ：

2019/4/27(土)20:02

4259.【バルセロナ・リスボン旅行記】画家マリアン・バサとのバルセロナの路上での運命的な出会い

—あなたの意思が高潔で偉大なものであれば、いかなる障害も塵となる—マリアン・バサ(ルーマニア出身の画家)

「えっ？何？この人は何してるんだ？」

オーガニックレストランを後にした私は、ガウディが建築したカサ・パトリヨを見に行く途中の道端で見かけた小柄な男性に対してそのように思った。

その小柄な男性は大道芸人のようであり、道端に腰掛けて、自分の足の指を使って器用にスマホのテキストメッセージに返信をしていた。どうやら彼は画家らしいのだが、手を使わず、足の指を使って携帯に返信するというのはなんとも器用でありながらも、同時にそれは幾分怠惰な行為ではないかと思えた。

私はこれからカサ・バトリヨを見に行くことを楽しみにしていたのだが、その男性の奇怪な行動に目が止まり、同時に彼が描いている絵のうまさにも目が止まった。そこで私の足がピタリと止まった。私はその瞬間、直感的にこの男性は何かを持っているように思った。足の指を使って見事に返信を済ませた彼が次に何をするのかに私は関心があり、絵の続きを描いてくれるのだらうと思った。

するとそこで私は、再び驚くべき光景を目にした。何と今度は、自分の足を使って絵を描き始めたのである。しかもそれは、手を使って描くと同じレベルの精巧さで。

私はもうその場から離れられなくなった。彼の目の前にいるのは私だけであり、私はさらに彼に近づいて、彼の描く絵をもっと見たいと思った。するとその小柄な男性は顔を上げ、「こんにちは」と優しく私に微笑みかけた。私も微笑み返し、挨拶をした。

私:「あ、あまりも器用かつ素晴らしい絵を描かれているので驚きました」

大道芸人の小柄な男性:「ありがとうございます」

私:「ここにあるカードは売り物ですか？」

大道芸人の小柄な男性:「あっ、いえ。それは私が描いたものですが、価格を付けて売っているわけではなく、その方の気持ちだけのお金を頂いて差し上げているものなんです」

私はなぜだか、目の前にいるこの男性の画家に大きな関心を持ち、そこから色々と話を伺った。彼の名前は、マリアン・バサ (Marian Basa) という。

彼はすぐに私の名前を聞き、これまた器用に足を使って私の名前を裏紙に書き、スペリングが間違っていないかを確認してくれた。そして、私が興味を示したポストカードの裏に、私のためにメッセージを添えてくれたのであった。そこで書かれた英語がこれまた私以上に達筆であり、私は心底驚いた。そこから彼と私はお互いにファーストネームで呼び合い、とてもフランクな会話を交わし始めた。

どうやらマリアンはルーマニア出身らしく、幼少の頃に病気を患って腕と手が使えなくなってしまったようだった。マリアンは、それまで使えた腕と手が突然使えなくなってしまったことにひどく落胆し、

絶望を経験したそうだが、そこから再起し、足で日常生活のすべてのことを行うように訓練を重ね、ルーマニアの首都のブカレストの芸術学校に通って絵画を勉強したそう。そして今は、旅をしながら世界各地で絵を描いているという話をしてくれた。また、マリアンは嬉しそうに、スマホのYoutube画面をこれまた器用に足で素早く開き、彼がスペインの料理番組に出演した時の映像を見せてくれた。

マリアンはなんと、足で絵を描くだけでなく、見事な料理までも足で作ることができてしまうのだ。私は彼の生い立ちと生き方に大変感銘を受け、ガウディの建築などそっちのけで、道端にしゃがみこんでマリアンと会話を続けることにした。すると、私たちが気さくに話し合っているものだから、道を行き交う観光客が徐々に集まってきて、そこに人だかりができた。実はガウディのカサ・バトリョがある場所まであと15mほどの距離だったのだが、ガウディのその建築物の前よりも私たちの前に人だかりができていたかもしれないと思うほどだった。

マリアンと私は、今日、バルセロナという街の道端で初めてあったはずなのだが、どうも私には、お互いの中の何かが共鳴し合っているように感じ、初対面だとは思えなかった。

マリアン:「あっ、ヨウヘイ、これ。ポストカードの裏に、君のためにメッセージも書いておいたよ」

そこに書かれていたメッセージとは、まさにこの日記の冒頭で引用したものである。だが、もう一度ここで繰り返しておきたい。

—あなたの意思が高潔で偉大なものであれば、いかなる障害も塵となる—

私はマリアンに多大なお礼を述べ、彼からのメッセージが書かれたポストカードを大事に握りしめながら別れの言葉を伝え、ガウディの建築物に向かっていった。そこで見たガウディの建築物は、マリアンの生き方の前に全くもって霞んでいた。一人の人間の生き様というのは、ある一人の偉大な芸術家の建築物を遥かに凌駕するのだと教えてくれたのはマリアンだった。

生きること。人間として最後の最後まで生き、自らの何かしらの小さな役割を全うしていくこと。それを誓いながら、私はホテルに向かって歩き出していた。それは即、この人生をもう一度今日その瞬間から歩き始めることを意味していた。バルセロナ:2019/4/27(土)20:38

バルセロナ三日目の朝が静かに始まろうとしている。今日はゆっくりと四時半に起床し、早朝の目覚めはすこぶる良かった。昨夜の就寝前に湯船に浸かったからか、睡眠は深く、熟睡ができた。これまでの数日間の旅の疲れも吹き飛び、完全回復がなされた自己がそこにいた。少し寝汗をかいていたようだったので、起床してすぐにシャワーを浴びた。つい先ほど自室のバルコニーにつながるドアを開け、空気を入れ替えることにした。

午前五時を迎えようとしているバルセロナは肌寒く、とてもひんやりとした清々しい朝だ。今日は日中の最高気温が16度までしか上がらないようであるが、最低気温は11度とのことなので、両者の間にそれほど差がないため、身体が気温に調節していくことは容易であろう。

今朝の目覚めの良さが象徴するように、バルセロナの旅もこれまでのところ非常に充実している。とにかく自分を呼ぶ場所だけに足を運び、そこでゆったりとした時間を過ごすという旅の姿勢を崩さずに過ごすことができているのがその一因だろうか。

今日もまたゆっくりとした時の流れを味わいながら、バルセロナという風光明媚な街で一日を過ごす。確かにバルセロナの中心街は、世界の他の都市と同様に人が多いのだが、この街の底に流れる陽気さ、街全体を包む陽気さが、この街を訪れる人たちの心を自然とくつろがせているように思う。

人は、緊張と弛緩によって成熟の道を歩んでいく。心身及び魂がこわばってばかりでは、それらの発達はありません。同様に、緩んでばかりいてもならない。私たちは、緊張と弛緩という二つの極を揺れ動きながら成熟の歩を進めていく。そのようなことを考えてみた場合、この人生の成熟過程において、弛緩が必要だと思える場合には、是非またバルセロナに足を運び、この街でゆっくりとした時間を過ごしたいと思う。逆に自己が緊張を求めている場合には、この街はあまり望ましくない場所であるように思えるぐらいに、この街の性格は陽気さとくつろぎに満ちていると言えるだろう。

早朝の五時を迎えたバルセロナは、まだ薄暗く、太陽が昇り始めるのはもう少し後のことになるだろう。ただし、この街はもう動き出しているようであり、近くのバルセロナ・サンツという大きな駅の周りから、ちらほらと行き交う車の音が聞こえ、駅に向かっていく人々の姿が見える。

私も今日もゆっくりと一日を始動させていきたい。今日は昨日に軌道修正させた計画に従い、午前中はホテルの自室にて、自分のライフワークに従事していく。主には日記の執筆と作曲実践、及び作曲上の写経実践を行っていく。昨日は午前二時に起床してしまい、そこから一日の活動を始めてみたところ、やはり睡眠時間が不足していたためか、午前と午後にそれぞれ一回ずつ仮眠を取るようになった。今日の目覚めは四時半であるから、午前中に仮眠を取る必要は全くないだろう。

上述の実践に並行して、今日もまた時間を見つけて、ウィルバーの監訳書の再校に対するレビューを進めていきたい。編集者の方からは十分なレビュー時間をもらっているが、私は一度仕事に取り組むとのめり込んでしまう傾向があり、昨日からレビューを始めたところ、隙間時間を使ったこのレビューが順調に進んでいき、すでに本文の2/5ほどのレビューを終えた。

今日は正午を迎えるまでホテルの自室でゆっくりしようと思っているため、レビューを少しばかり前に進めたい。複数の実践の合間合間にレビューを地道に進めていくことによって、着実にレビューが進んでいることを実感している。やはり物事の基本は、地道な積み重ねなのだ。いや、人生の本質は、地道な積み重ねなのだ。そのようなことをバルセロナ滞在三日目の早朝に思う。バルセロナ：

2019/4/28(日)05:11

No.1896: Spanish Metaphysics

I noticed that the city of Barcelona embodied unique metaphysics. I'll not go sightseeing anywhere today, but instead, I'll just relax in a cafe in Barcelona. Barcelona, 07:43, Monday, 4/29/2019